

◆奥多摩の達人紹介◆

民話の語り部 荒澤 弘さん

奥多摩で唯一の民話の語り部として、46年にわたり活動されてきた「民話の達人」である荒澤弘(あらさわひろし)さんにお話を伺いました。



Q. 民話の語り部となったきっかけは？

A. 町おこしのため、奥多摩地域の魅力の一つとして民話の聞き取り調査をしていた頃、地元の古書が話す内容を文字に起こしてみることが、書き言葉では古老からの「ぬくもり」がうまく伝わらないことに気が付きました。そこで、自らが語り部となり、修行を重ねることで、いまもその「ぬくもり」が感じられる地元の民話を伝えています。

Q. 一番おすすめの民話は何ですか？

A. 「熊をくすぐる」ですね。奥多摩の大丹波という集落で江戸時代から戦前まで実際に行われていた独特な熊獵の様子を現在に伝えるお話です。



荒澤さんは、地元の小学校などの授業で、いまも奥多摩の民話を語り伝えています。

シリーズ

奥多摩の野鳥

■サシバ

Vol.105



漢字名：差羽
タカ目／タカ科

レア度 ★★☆☆

- **大きさ** 全長49cm
- **なき声** 「ピウイー」
- **特徴** 雌雄ともにほぼ同色。上面と胸は茶褐色で雌のほうが淡色。喉は白く黒褐色の線が入る。目の上部に白い眉斑があることが多い。



メ モ 爬虫類や両生類を好んで捕食する。春や秋の渡りの時期には、大群で飛ぶことがある。



どこで観察できる？

国内：九州以北では夏鳥、南西諸島では冬鳥として飛来する。平地から山地の林や水田、湿地に生息。
奥多摩：夏鳥として飛来。過去には、4月の下旬に奥多摩むかし道において、サシバのタカ柱が目撃されている。

第107号 (4月号) 毎月発行



奥多摩を
歩こう!



★奥多摩の民話



東京都 奥多摩ビジターセンター

URL: <https://www.tokyopark.or.jp/nature/okutama/index.html>

住所：東京都西多摩郡奥多摩町氷川171-1

電話：0428-83-2037



公益財団法人 東京都公園協会

お客様サポートセンター (協会の事業全般に関するお問い合わせ)
電話：03-3232-3038 ※8:30～17:30 (土日・祝日・年末年始を除く)

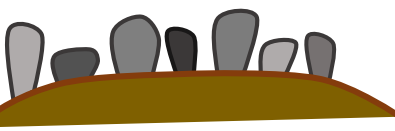
奥多摩に伝わる民話

奥多摩では数多くの民話が語り継がれています。今回の『奥多摩を歩こう!』では、奥多摩地域で、よく知られた場所が舞台となった民話をご紹介します。

① 将門とセツ石

昔、関東制覇の夢に破れた平将門はセツ石山まで落ちのびてきました。その将門を追ってきた猿藤太は、三頭山から、セツ石山山頂に将門らしき7人の人影を見つけ、弓で射ようとしています。しかし、どの人影が将門か見分けがつかず、困った藤太は成田山不動尊に祈ったところお告げを受けます。次の日の朝、お告げの通り、湯気の立ち上る人影へ弓を放ったところ、見事に将門を射抜くことができました。

セツ石山に今ものこる7つの巨石は、将門七武将の化石だといわれ、このことから山の名前がつけられたといわれています。



② おつねの泣き坂

昔、川野村の館におつねという女中がいました。おつねは館近くの丘にある寺の修行僧である香蘭とめし合わせは、逢瀬を楽しむのでした。それを知った住職は修行の妨げになると考え、香蘭を遠く離れた甲州西原村の寺へ移籍させました。

おつねは香蘭と会えなくなった寂しさから、ある夜に会いたい一心で館を抜け出しました。三頭山を越えて5時間、香蘭と再会して幸せの一時を過ごしたあと、後ろ髪をひかれながら帰路にたちました。帰路の道中、お地蔵様に二人の行く末を祈っていると夜明けを知らせる鐘が鳴り、村の方では朝食を炊く煙が上がっていました。帰りが遅くなってしまったことに気づいたおつねは泣きながら坂を下りるのでした。里の人は、その場所を「おつねの泣き坂」と呼ぶようになったそうです。



③ 愛宕山の火防天狗

JR青梅線奥多摩駅から大岳山に向かう登山道の途中に麦藁帽子のような形をした愛宕山があります。山頂には火防の神様が祭られた愛宕神社があります。



昔、麓の里に火事があるとき、その前触れとして山頂に火柱が上がり、身の丈3mもある天狗さまが鈴を鳴らしながら里を歩いて回ったといわれています。村人は鈴の音が聞こえると家の前に水桶を用意して、用心しました。今でも愛宕山は火防さまとして、消防団や集落の人の厚い信仰を集めています。



④ 棒の折

昔、源頼朝の家臣であった畠山重忠は秩父、畠山を治めていました。幕府のある鎌倉に向かうとき、重忠は名栗から峠を越えて軍畑を通って行きました。雄々しく美男であった重忠が街道を通ると、多くの人々が重忠見たさに集まってくるのでした。その人だかりをうろうろしく思っていた重忠は、ある時、街道を避けて、名栗から尾根を抜けて見晴らしの良い山の頂上に立ちました。みなぎる力を抑えがたい重忠は、手に持っていた石の棒をもののみごとに折り、半分を奥多摩側大丹波の谷へ、もう片方を秩父側名栗の谷へ投げ分けたということです。そこから、この山を棒の折といい、山頂を棒の嶺と呼ぶようになりました。奥多摩側に投げられた石棒は、今も山腹の祠に祭られています。



参考文献：奥多摩民話の会(1987年)『おくたまの昔話 第一集』奥多摩民話の会
奥多摩民話の会(1987年)『おくたまの昔話 第二集』奥多摩民話の会
奥多摩民話の会(1990年)『おくたまの昔話 第三集』奥多摩民話の会

各地を訪ねる際は奥多摩ビジターセンターで情報収集を!